設立4年「イスラエル日本学会」

コーネル会長寄稿

「イスラエル日本学会」設立４年、「東日本大震災シンポジウム」「東京大空襲に関するシンポジウム」を開催するなど、ダイナミックな活動を行っています。会長を務めるロテム・コーネル・ハイファ大学教授に学会設立のきっかけと歩み、日本研究の現状などを日本語で書いていただきました。

初の〝アジアの国対象〟数多い集中的研究者

「イスラエル日本学会」は2012年に設立されました。この学会は、イスラエルで最初にアジアの国を扱った学会です。もちろん、イスラエルには長い間、中東に焦点を絞った学会がありますが、それ以外のアジア諸国、特に東アジアの国を扱っている学会はありませんでした。「イスラエル日本学会」設立の背景を説明しましょう。

前世紀の90年代まで、東アジアを研究する学部はエルサレムのヘブライ大学にしかありませんでした。当時研究者の人数が少なかったので、学会の必要性はありませんでした。しかし、80年代の日本の経済的発展と1992年にイスラエルが中国やインドと外交関係を樹立したので、イスラエル社会でアジアに関する興味が高まりました。その結果、テルアビブ大学（1995年）とハイファ大学（2002年）にアジア学部が設立され、短期間でイスラエルのアジア研究の状況が一変しました。

東日本大震災シンポジウム

この新たな状況で、３大学間の研究競争だけではなく、同時に協力関係も打ち立てられました。そして、２００１年に全アジアについての年次研究学会が開催されるようになりました。この学会は3大学間で持ち回りで開かれ、東アジア、特に日本と中国に関して意見交換の良い機会になりました。

数年後、学会にインド、東南アジアと中央アジア研究も加わりました。最近の傾向は年間約150～170件の研究発表が行われ、その内の3分の1は外国からの研究者によるものになっています。

そして、イスラエルの日本学研究の場合は、最近の10年間、特に盛んになっている中国研究と比較して、僅かに低下現象の傾向が見られました。その傾向を食い止めるため、3大学間の協力が必要でした。ある意味で、「イスラエル日本学会」の設立は日本研究補強の試みでした。各大学では日本研究が余り目立っていませんが、全イスラエル国内を総合すると、日本を集中的に研究している人たちの数は多いのです。大学の常勤講師が約15人と博士号を持っている非常勤講師や大学院生が約50人です。

4年前に「イスラエル日本学会」が設立されてから、やはりイスラエルの日本研究が変わりました。在イ日本大使館、日本国際交流基金と3大学の支援で学会活動は活発になりました。この短期間に、幾つかの国際会議、大学院生のためのワークショップや日本語スピーチコンテストも開催しました。日本語能力検定試験（ＪＬＰＴ）も企画され、毎年、約70～90人の受験者がいます。

さらに、ヘブライ語の月刊ニュースレターと英語版（年2回）を出しています。さらに学術研究誌（Innovative Research in Japanese Studies - IRJS）も発行しています。

現在、「イスラエル日本学会」には150人の会員がいます。4年間を振り返ると、満足感がありますが、これからも全身全霊を打ち込んでいきたいと思います。